

翻訳に当たって

この報告書は、米国のマンハッタン管区原子爆弾調査団が広島・長崎の都市とその住民に与えた原子爆弾の効果および影響を調査して最終報告としてまとめたものである。調査団は軍医らによって2隊編成され、第1隊は昭和20年9月20日から10月6日まで長崎に派遣され、第2隊は10月3日から7日まで広島に派遣された。

この調査団派遣の主な目的は、原爆から出た放射能および残留放射能を測定することと、それらの人体への影響を短期間に明らかにすることであった。この頃すでに、原爆被爆者に「被爆後しばらくしてから現れた不思議な影響」が日本側から報告され始めていた。また、もし残留放射能が異常に高ければ、占領軍の放射線被曝を真剣に考えなければならない背景があった。

このような目的でなされた米軍の調査であったが、日本側の医師、その他の協力もなされ、終戦直後の種々の制約にもかかわらず、完遂されている。軍事目的の調査ではあったが、この報告書には貴重な科学的、医学的内容が多く含まれている。医学的調査に関して言えば、人類史上はじめて実戦に使用された核兵器による、きわめて多数の住民の大量放射線被曝による人体影響が、医師らにより被爆後40日から60日の間に観察され、また被爆直後の入院カルテなどを含め、多くの医学的資料が収集され、分析されている。その概要はこれまでも同報告書の抄録として知られていたものではあるが、急性症状の種類と被爆距離別の頻度など、興味深いデータが多い。歴史的には、この報告書に基づき、さらに大規模の日米合同調査が行われることとなった。

残留放射能については、旧式の機器による測定で放射線量を推定しているが、その後の研究により確立したDS86線量再評価において採用された残留放射線量と大きくは違っていない。

この報告書は原爆50周年の特別取材によってNBC放送の関口達夫氏が米国の国立公文書館の許可を得て、入手されたものであり、同氏の強いお勧めがあり、翻訳の運びとなった。翻訳に当たっては、原爆後障害研究に携わる当原爆後障害医療研修施設の有志の賛同によって翻訳グループが編成され、約3年間の年月を経て翻訳が完成した。その後、内容の吟味、図表の精査などにさらに2年を擁して完成したものである。戦後55年間にわたって、行われてきた原爆後障害研究のもっとも早期の調査研究のひとつとして、この報告書がより多くの研究者の参照するところとなり、後障害研究に役立つことを念願する。

最後に出版に際しては長崎平和推進協会および長崎市の原爆死没者慰霊等事業費補助金の補助を受けたことを記して、ここに感謝の意を表します。

平成14年1月1日

翻訳グループ代表

奥村 寛

朝長万左男

報告書の入手の経緯

NBC 関 口 達 夫

NBCは、被爆50周年の1995年に報道特別番組「核時代と人間」を制作した。この番組のテーマの一つは、原爆投下の「実験」としての側面を検証することだった。このためにアメリカが原爆投下を決定する過程と原爆投下時、そして投下した後にどのようなことを検討し、調査したのか、その目的は何であったのかをアメリカの公文書をもとに検証した。これらの公文書は、アメリカの民間のシンクタンクに依頼してワシントンの国立公文書館から入手した。その一つが、マンハッタン調査団の最終報告書であった。

マンハッタン調査団の報告書だけをもって原爆投下の実験としての側面を立証したとはいえない。しかし、この報告書は、アメリカが長崎、広島への原爆投下によってどのような情報を得ようとしたのかを示している。つまり、アメリカはマンハッタン調査団等を長崎、広島に派遣することによって、原爆の効果、特に放射線が人体に及ぼす効果、ないしは影響を調査し、その情報を得ようとしたということである。アメリカは、マンハッタン調査団などの調査結果をもとに原爆の威力を確認し、核兵器を戦後の軍事戦略の柱と位置付けたのだと思う。その意味で、この報告書は、歴史的な価値があるものだと判断し、翻訳してその全貌を市民に伝えと共、後世に残すべきだと考えた。そこで原爆後障害研究に取り組んできた長崎大学医学部の研究者に翻訳してもらい、長崎平和推進協会の協力を得て出版することを考えた。幸い朝長、奥村両教授が、私の提案を快く引き受けて頂き感謝している。

今回の報告書の翻訳と出版は、被爆地の大学と行政、マスコミが協力することによって、アメリカが原爆投下によってどのような情報を得たのかを明らかにしたという意味で大きな意義があると思う。今後とも被爆地の行政、大学、マスコミは、原爆投下に関する原資料をアメリカから入手し原爆投下の全貌を明らかにしていく義務があると思う。

最後にマンハッタン調査団の膨大な報告書は無報酬で翻訳し、出版にこぎつけられた朝長、奥村両教授をはじめ医学部のスタッフの皆様のご尽力に敬意を表します。

— 翻 訳 —

広島・長崎マンハッタン管区原子爆弾調査団最終報告書

翻訳グループ

監 修

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設

朝長万左男

奥村 寛

翻 訳

セクションA：医学的調査

第I部 臨床と検査

第I章～第II章

三根真理子

近藤 久義

本田 純久

横田 賢一

第III章～第V章

貞森 直樹¹

栗山 一孝

山田 恭暉²

樫田 三郎³

雨森 龍彦⁴

第II部 病理

岸川 正大⁵

井関 充及⁶

セクションB：放射線

島崎 達也⁷

岡市 協生

井原 誠

〔注〕現在の所属：¹県立長崎シーボルト大学、²長崎大学医学部臨床検査医学、
³国立長崎医療センター内科、⁴長崎原爆病院内科、⁵愛知県心身障害者コロニー発達障害研
究所、⁶長崎大学熱帯医学研究所宿主病態解析部門、⁷熊本大学アイソトープ総合センター

この資料は、1994年10月28日に国立公文書館において複写されたものである。

19 April 46

1946年4月19日

Subject: Transmittal of Report.
To: Colonel Stafford L. Warren, M.C.
Chief of Medical Section
Manhattan Engineer District
P.O. Box E
Oak Ridge, Tenn.

内容：報告書の送付
宛先：Stafford L. Warren, M.C. 大佐
医学部門主任
マンハッタン技術者管区
私書箱 E
オークリッジ、テネシー

1. Enclosed herewith is the FINAL REPORT OF
FINDINGS OF THE MANHATTAN
DISTRICT ATOMIC BOMBS
INVESTIGATING GROUPS AT
HIROSHIMA AND NAGASAKI.

2. A preliminary report of the findings was
submitted in December 45.

3. This final report, prepared under the general
direction of the undersigned, consists
essentially of three sections. They were
prepared under the immediate direction of the
following personnel:

A. General introduction and medical study:

Part I. Prepared and written by Capt. H. L.
Barnett, M.C. and reviewed by Lt. Col. E.L.
Friedell, M.C. and G.V. LeRoy, M.D. The
statistical analysis and interpretation was
done by W. J. Wantman. and D.Tiedeman.
M.J.Wantman also assisted materially in the
writing of Part I.

Part II. Prepared and written by Capt. J.
Howland, M.C.

B. Radiation: Prepared and written by Capt.
R.Tybout, C.E.

C. Physical damage study:

Part I. (Hiroshima) Prepared and written by
Major N.Varley, C.E.

Part II. (Nagasaki) Prepared and written by
Major W.C, Youngs, C.E.

4. Translation of Japanese documents was done
under the direction of Lt. I.V. Munch, M.I.

(Signed)Henry L.Barnett

Capt., M.C.

HLB:sb

1. ここに同封したものは「広島と長崎における
マンハッタン管区原子爆弾調査団の所見に関
する最終報告書」である。

2. 予備的な報告書は1945年12月にすでに提出さ
れている。

3. この最終報告書は以下に署名した者によって
監修され、基本的に3章からなっている。こ
の3章は下記に示す人々によってまとめられ
た。

A. 総説および医学的研究

第一部。H. L. Barnett, M.C. 大尉によって執
筆され、E. L. Friedell, M. C. およびG. V.
LeRoy, M.D. によって査読されたものである。
統計学的分析とその解釈はM. J. WantmanとD.
Tiedemanによる。M. J. Wantmanはさらにこの
第一部の執筆に必要な材料を整えた。

第二部。J. Howland, M. C.大尉によって執
筆された。

B. 放射線

R. Tybout C. E.大尉によって執筆された。

C. 物理的破壊の研究

第一部。(広島) N. Valey, C. E.大佐によっ
て執筆された。

第二部。(長崎) W. C. Youngs, C. E.大佐に
よって執筆された。

4. 日本語の文書の翻訳はI. V. Munch, M.I.少尉
の指導の下で行われた。

(署名) Henry L. Barnett 大佐